



社会福祉法人友愛学園
広報誌 VOL. 43

発行日 令和5年3月31日
発行人 社会福祉法人 友愛学園
〒198-0001 東京都青梅市成木 2-107
電話 0428-74-5453
F A X 0428-74-6906
<https://www.yuaigakuen.or.jp/>



題字 学園創始者 元理事長 故実川 博 書

時間、共感、居場所をめぐって

理事長 河津英彦

コロナ禍での事業活動は四年目に入る。三年前の五月、NHKの新型コロナウイルス感染症特別番組で、収束まで何年かかるか専門家たちに想定させたことがある。一年、二年、三年の選択肢はおおむね二割、五割、五割に分かれた。視聴者としては希望的観測に跳びつきたい。その時の私はあと二年の辛抱と考えた。それでも長いなと思いつながら。

三年がたち、コロナの第8波は急速に減少しており、政府は五月の連休明けから感染症のレベルを5類に下げることを選定した。

友愛学園は、幼児から成人まで幅広い利用者への関わり合いの中で事業展開している。「時間」の大切さ、施設が「居場所」になっているか、また職員と利用者の共通基盤としての「共感」について改めて考えてみたい。

1. 年齢による時間認識の違い

人が感じる時間の長さは、年齢によって異なるという。NHKの「チコちゃんに叱られる」では心理学者の説として、子どもは毎日起こることが新鮮でわくわく感がある。歳をとるとわくわく感が減るため一年が短く感じられると説明していた。充

実した生活をしていると一日は短く一年は長い、空疎な生活ではその反対になることは、経験としてわかっていたが「わくわく感」をどう提供できるかと言う課題も施設には必要である。

一方、朝日新聞の「天声人語」では、十三歳の囲碁棋士、仲邑菫さんが十歳でのプロデビューから三年十一か月で初タイトルを手にしたこと、に触れて「本人にとっては案外と長く、濃密な時間だったのかもしれない。何しろ彼女の人生のほぼ三分の一に相当する時間である」と書いている。

コロナ禍でのマスク着用や身体接触を阻むことの懸念については、令和三年三月発行の広報誌「友愛」でも書いたが、子どもにとっての三年という時間の長さを認識すべきであろう。イギリスでは教育水準監督局がコロナ禍での影響について「相当数の子どもたちに、言語の獲得の遅れや表情の乏しさ、不安傾向という影響が出ている」との報告書を昨年四月に出している。対策として保育、教育現場に言語療法士などの専門家を派遣する事業を起し50億ポンド（8000億円以上）を投資したという。

2. 居場所の意味

「居場所」とは単に物理的な場所を指すのではない。そこには人とのつ

ながりがあり安心して自分を表現できる場所を指す。障害がありながら医師であり東大准教授である熊谷晋一郎はコミュニティと呼ぶ。

北九州市でホームレスの支援活動をしてきた牧師の奥田知志は、公園で寝泊まりしていた人に生活保護を受けさせアパート住まいで一件落着と考えたところ、大家からごみ屋敷になっていることを告げられた。ごみの向こうに布団が敷いてあり、被保護者は生きていたが、訪ねる人も無く、訪ねていく人もいないことに気づいた。ホームレスは家無き人ではなく家庭無き人だったのである。それ以来「抱樸の会」を立ち上げ、仲間を募り葬式まで出す会員制の組織を立ち上げている。

我が国で高齢の単身世帯は四割に達した。また、週三日以上家を出ない人を「閉じこもり老人」と言うが、定年退職後の男性に多く、七十歳を過ぎると医療費の増大につながる。イギリスでは孤独による社会的損失を4・7兆円と試算し孤独担当大臣を置いており、我が国もそれに習っている。

品川区では子ども・若者の「フリースペース」事業を行っている。学校や職場にいけない子ども・若者のための居場所運営事業である。フリースクールとは別であるが、実際には小学校三年生の不登校児童から五十代の引きこもりの人まで受け入れ

ており、800名の登録者は区外の人も四分の一を数えている。昨年七月の広報誌「友愛」で触れたわが国の「子ども・若者大綱」（令和三年度版）でも、すべての子ども・若者が「居場所を得て」がキーワードになっている。

このように、多くの人が生き辛さを抱え「居場所」を求めているなかで、一昨年、五十周年を迎えた青梅福祉作業所では、都立時代の開設時から五十年間通い続けた利用者が二人いたのである。利用者にとって「居場所」であり続けたことに間違いはない。法人の事業所すべてがそうありたいと考えている。

3. 共感と意向の尊重

カウンセリングで「聴く」ということは、言葉の内容より身体全体で表現している「気持ち」を受け止めることである。

人は生後間もなくから、自分で動くものと、動かないものの区別を知るようになり、自分で動くものには「意図」があることを気づくようになる。母親が見ているものへの視線追従は九か月から、意図を理解して共同注視するのは十二か月頃からである。乳児保育の現場では三か月くらいから他児の行動をじっと見つめたり、声をあげ手足をバタバタさせる行動が見られている。

現在では、他者の意図が通じると

き脳内のミラーニューロンが作動することが分かっている。マカクザルの脳研究から解明されたのだが、動物は言葉以前に気持ちを通じ合う手段を身に付けている。人類に限らない。動物園で飼われているボノボが、壁に当たって落ちた鳥をつかみ木に登って空に離したことや、イングランドの川で溺れかけた老犬をアザラシがそっと岸まで押し上げた事例など動物の利他行動もたくさん報告されている。自然界における協力（共生あるいは道徳）の起源に共感する力（sympathy、empathy）を求めることは的外れではないように思われる。

知的障害はあっても感性は年齢通り発達する。一九八五年十二月、私は最重度の知的障害者施設である都立八王子福祉園の生活指導第一科長として赴任した。着任してまもなく実習生の日誌に「雪がちらちら舞う日、手をこすり合わせていると、隣に座っていたUさん（五十代の穏やかな利用者）が自分の手を取って暖めてくれた」という記述が目にとまった。そのことを、それまで勤めていた青梅市にある教護院の卒業文集に寄稿した。一人の利用者の手がどれだけ実習生の心を温めてくれたか、人とのふれあいの中で誰にでもできることはあるのだと伝えたかった。手を暖めると心が温まることは科学的にも実証されていることを知った

のは最近のことである。

社会福祉事業の基本を定めた「社会福祉法」の第5条「福祉サービスの提供の原則」には「利用者の意向を十分に尊重し」と言う言葉が入っている。ここで注目する言葉は「意向（view）」であり「意見（opinion）」ではないことである。乳児院にいる赤ちゃんから障害者施設にいる言語表現が十分でない人までを包み込む概念である。

先に挙げた熊谷晋一郎は「当事者研究」（岩波書店）の中で、「居場所（コミュニティ）」という表現をしている。コミュニティとは家族の周辺にある直接ふれあえる集団である。施設では利用者同士、利用者と職員、そして近隣や買い物先などの人たちと織りなす関係であろう。そしてコミュニティとコミュニケーションは語源が同じであることも忘れてはならない。十分な意思疎通ができてこそ「居場所」と呼べるのである。

令和4年度の終わりに

事務局長 内山 敏

この広報誌が発行される頃には、理事会も終わっている。議案は二十を数えるので無事、終わっていることを祈りたい。

なぜ、こんなに多くの議案となるかというところ、令和5年度を迎えるにあたり、青梅福祉作業所以外の事業所で施設長が交代となるからである。これまで成人部施設長が兼務していた相談支援・グループホームは単独の事業所として独立する。渋谷区では、令和5年10月から代々木の杜ピア・キッズが児童発達支援センターとなる予定であることから施設長を配置する。新たに施設長となる者が3名、副施設長となる者が3名である。これらの人事異動に関連して当然のことながら、指導職クラスの職員にも動きはある。そして、新年度には新任職員が入職してくる。

それぞれの事業所で新たな職員集団が生まれ、そこで十分な意思疎通がなされて、職員一人ひとりの利用者への想いがつながり、利用する人にとっても、職員にとっても、しあわせを感じられる居場所となることを令和4年度の終わりに記しておきたいと思う。



「立飛ウォールペイントプロジェクト・ドリムロード」への参加

2023年9月に立川で行われた壁画制作に参加しました。立飛倉庫（立川市泉町）の道路コンクリート塀に複数のアーティストが原画を描くプロジェクトです。

友愛学園からは、白田祐太さん、永瀬洋昌さんを中心に、ダイナミックな原画を描かれました。8メートルの大きな絵を描くのはとても難しく、約2か月間、絵の構想を練り、何度も大きなキャンバスに絵を描くなど練習を重ねてきました。当日、「みんなは見えてくれるかな」「市長は来るかな」と想像と期待を膨らませながら会場に着くと、練習の成果もあり、思い思いに力強い筆圧で描かれていました。そして、3日目で壁画が完成し「自分で描いたんだ」と実感されている様子でした。コロナ禍により、外に出てイベントに参加する機会は少なくなりましたが貴重な経験を積むことができました。

この壁画は、「アートでつなぐ多様な個性」をコンセプトに多摩地域で暮らす方々によって全32作品が制作されました。場



所は、東京地方裁判所立川支部の向かいにある、立飛リアルエステートの持つ倉庫街のエリアの道路沿いに長く続く壁にあります。自由に見学ができる場所で、多くの方が行き交います。作品からは原画の持つ力を肌で体感でき、感動を伝えていきます。主催は、アールブリュット立川で、ARTを通じた様々な活動をされています。友愛学園成人部では、毎年交流させて頂いています。また、アール・ブリュットとは、加工されていない「生(き)の芸術」という意味の仏語で、伝統や流行に左右されず自身の内側から湧き上がる衝動のままに表現した芸術のことを言います。



(生活介護主任 大矢将司)

令和4年度を振り返って

グループホームの利用者と付き合いだして6年が過ぎようとしている。一人ひとりと関わってみると、本当に個性的で逞しさを感じる。朝、いつものように自転車に乗り出勤する利用者、忙しい年末年始も土曜日は休日返上で、大みそかまで

働く。コロナ以前は、大みそかの仕事納め後、そのまま都心まで出かけて新しい年を迎えていた。そんな彼も、コロナを意識して年中行事は控えている。親戚や職場で良くしてくれる人への感謝を忘れず、彼が贅沢品を買ったなど思う時には、必ずと言ってよいほど、その方々にも贈っている。お裾分けをしているようだ。

ある日、私が市役所で用事を済ますと、見慣れた利用者が歩いてきた。国が示したように室外ではノーマスク、率先して実践しているようだ。人がいる場所や室内では、きちんとマスクを着用している。手を振って話かけると、近くの駅で予定している改修工事の話になる。踏切の一つが閉鎖になるとか。一聴すると怒っているかのように勢いのある言い方で、青梅線が十二両編成になるといい、その為のホーム延長で、グリーン車が走ると言う。彼の職場はコロナ禍以後、間引き出勤となっている。あれだけ楽しんできた一人での宿泊旅行も、「そろそろ再開する？」と誘いをかけても、「うん、もう少し後かな」と慎重だ。

春先通勤時に転倒し骨折した利用者が再び骨折した。通所先から帰宅した際には既に歩けず、二人がかりで抱えて送迎車から降りた。医師の見立てでは転びそうになったところを踏ん張ったことで、アキレス腱が踵の骨を骨折させてしまったとのこ

と。本人が言っていた「転んでいない」との答えとも一致した。大怪我をしても殆ど痛そうにしない彼女も、今回ばかりは顔をしかめた。リハビリの先生が、骨の位置を戻すと言いながら患部をぐいぐいと押している。歩行ではあるが再び歩き出している。

グループホームの利用者を支援して不安に思うことは、この個人的な利用者の思いを支え続けることが出来るかといった点だ。事業体としては余りに組織が小さく脆弱さもある。法人が運営するグループホームは4ユニット、現在26名の方々が生活している。市内には大小合わせて24事業所69のユニットのグループホームがあるらしい。急成長した事業体であるが故か、横の繋がりはまだ希薄だ。

先日参加した研修会での話。その先生は、近隣のグループホームを訪ねて研修会や他団体との関係を築いているとのこと。目的は「支援の質の向上」。来年度、私たちは、その一役を担えるよう取り組んでいこうと考えている。先ずは、その先生に会いに行こうと思う。



そらふねからの夕日

(管理者 宮崎啓太)

冬のイベント『鍋パーティー』

冬から春にかけてはクリスマスや初詣、節分にひな祭りなど、子どもたちにとっては楽しいイベントがたくさんある季節です。いろいろなイベントの中から、今回の広報誌では冬休み期間に行った『鍋パーティー』を報告させていただきます。

鍋パーティーを企画しようと思ったのは、職員間の何気ない会話にある子どもが反応したことでした。「寒くなってきたし、鍋でも食べた

いね」と冬に寒くなってくると誰でも挨拶がわり、世間話的な会話をしている横で、子どもが急に怒り始めたのです。子どもがなぜ、急に怒り

始めたのか、職員は驚くやら、原因を確認するためにおろおろしてしま

うほどでした。「鍋は食べません！」と涙を流しながら怒っています。そ

れでも、職員はまだ怒っている原因がわからないでいると、「鍋は食べ

ません、鍋は中身を食べます!!」と子どもが教えてくれたのです。たし

かに土鍋は食べられません。私たちは『鍋』『鍋料理』と暗黙の了解と

いうか無意識に解釈して会話をしています。しかし、この子どもは、文字の意味の通りに受け取っていたのです。小さい時から施設に入所すると、一つの鍋や大皿から料理を分け合って食べるという家庭的な経験が

少ないことに改めて気づかされ、土鍋とガスコンロを使った『鍋料理』を子どもたちに食べてもらう機会を設けたいということになりました。

そして、この冬、児童部のイベントとして、『鍋パーティー』を開催したので。冬休みも終わりに近い一



月七日午後、おやつ代わりに『鍋パーティー』を行いました。午前中は子どもたちにも野菜切りなどの準備

を手伝ってもらい、おやつ時間はグループに分かれて鍋を煮てもら

うところから関わってもらいました。同じ食材を用意したのですが、投入

の仕方がグループごとに違い、別の鍋を見ているような印象を受けまし

た。普段、児童部でも学校の給食でも、それぞれに盛り付けられた食事を

食べているので、みんなと同じ鍋から取り分けて食べるという経験が

少なく、食が進まない子どもがいるかと思うと何度もお代わりをして、最後は苦しがる子どももいました。他の子どもの器によそってあげたり、入れてほしい具を聞いてあげるなど、相手を意識する、思いやる場面も見られました。また、熱い料理を食べ

る機会も少ないので「フーフー」と息を吹きかけながら料理を冷まして食べるという、家庭なら何気ない経験もすることができ、熱いまま食べてしまい、慌てて飲み物を飲むという姿も見られました。職員に『鍋パーティー』のヒントを教えてください。子どもは、すでに高等部を卒業して退所してしまいましたが、これからも『鍋パーティー』は冬のイベントとして児童部で行われて、子どもがおいしく笑顔になる時間となると思います。来年はおやつではなく、昼食にして、具材をもっと豪華にしてあげようという話も出ています。来年はどうなることでしょうか!?



最初に書かせていただいた『鍋は食べられない』というエピソードは、障害、特に発達障害の生き辛さを表していると思います。余談になりま

すが、この一件は児童部で、新任職員が入職した際や実習生を受け入れた際などに発達障害の障害特性を伝える際のエピソードとして使われています。

(余暇委員会 岩崎沙莉)

とことこ 冬の創作活動

とことこでは、季節を意識した創作活動を行っています。この冬はとことこで育てたサツマイモを使って創作活動を行いました。蔓を使ったクリスマスリース、正月にあわせて干支を使った芋版作り、もちろん、サツマイモは調理をして美味しくいただきました。



創作活動は季節を感じてもらいながら作るだけでなく、『話を聞く』『見本を見て取り組む』『手元を見て取り組む』などの目的を設定し、意識するように促しながら行っています。子どもが笑顔になるだけではなく、作品を見て、ご家族が笑顔になり、そんな姿を見た職員もうれしくなることができる創作活動に取り組んでいきたいと思えます。

(児童発達支援管理責任者 富田祐子)

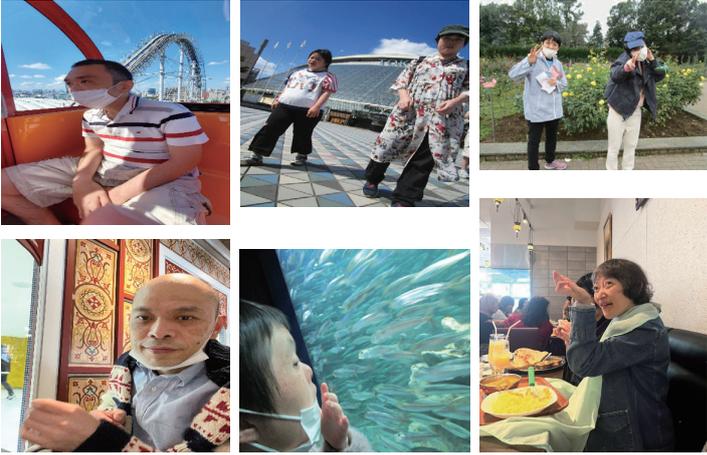


はあとびあ原宿

「街に出て」

はあとびあ原宿 成人

新型コロナウイルスの第7波が少し落ち着いていた秋口に、入所の利用者さんがバスハイクに出かけました。各々の希望に沿い、小グループに分かれまして。しかし、第8波のあおりを受け、十二月は、はあとびあもクラスターになってしまいました。そのため最後の一組は、三月に延期しています。また、通所の利用者さんの企画は、次年度に向けて計画中です。



十二月初旬の「ドキドキときめき展」には主に制作者が、バスで向か

いました。自分や仲間の作品が飾られているところで表情も和らぎます。はあとびあ館内では歩いていても、外では車いすを使う方も増えました。安全に、楽しく毎日を過ごすことはもちろん、利用者さん一人ひとりが、自分の力を存分に発揮できるように、支援を工夫しています。



クリスマスの時期には街の景色も華やかに変わります。



初詣には、近くの神社へお参りに行きます。大きな神社は人も多いで、小さな神社でのんびりと、清々しい新年の気持ちを感じます。みんなの願いが届きますように。

(副施設長 板澤純子)

「キッズはあとびあ祭」

はあとびあキッズ

新型コロナウイルスの感染者が初めて確認されてから三年が経ちました。感染拡大予防対策に追われる日々の中で、あっという間に時間が流れていったように感じます。今年度、新しくキッズがチャレンジしたイベントに「はあとびあ祭」があります。例年は、模擬店やステージ等あ祭に参加していましたが、今年はキッズのスペースで利用児・家族向けのイベントを開催しました。コロナによりこの三年間一度も施設全体ではあとびあ祭が開催できていないので、児童発達支援のほとんどの利用児・家族は「はあとびあ祭」というイベントを体験したことがありません。今回、このイベントを開催すると保護者に伝えた時には、予想以上の反響がありとても楽しみにして家族で訪れてくれました。



さて、当日は2つの保育室と遊戯室を使って、「活動場面上映する部屋」「エアートランポリンの部屋」「ゲームコーナーの部屋」にわけ、



一時間ごとの入れ替え制としました。午前中は児童発達支援の利用児、午後は日中一時支援の利用児を対象とし、事前に来所時間の希望を取り、密になりたくないように入数調整を行っています。特にエアートランポリンは人気の遊具でもあるため一回十五分と決めました。子ども達は入れ替えにもしっかり対応してくれました。ゲームコーナーのゲームは「的あて、サイコロゲーム、おもちゃすくい」の3つでした。当たりとはずれがあり、子ども達は少しドキドキしながら真剣にチャレンジしていました。どのゲームをやっても必ず賞品はもたえ、いくつかの賞品の中から選ぶことができるので、自分で選んだ賞品を持って満足げな表情で帰ってもらえました。

日々の療育を充実させていくことは当然ですが、利用している子どもや家族と一緒に楽しめる時間の提供も、家族支援の一環として大事であることを実感した一日でした。来年度も楽しいイベントを検討していきたいと思っています。

(施設長 平井眞琴)

はあとぴあキッズ

代々木の杜ピア・キッズ

「ペアレントトレーニング」の実施について

児童発達支援や放課後等デイサービスにおいて、大切な役割の一つに保護者支援があります。

しかしこの数年は、コロナ禍の中で保護者のみなさんと集う機会を設けることが出来ていませんでした。そのような中でも、保護者の方からは「グループのママたちとゆっくり話したい」「先輩保護者の話が聞きたい」等のご要望があり、今年度は実施の機会を増やしていくこととなりました。

また、今年度は初の試みとして、低年齢児さん向けの個別相談と、午後グループ利用の方向けのペアレントトレーニングを行いました。低年齢児さん向けの個別相談では、講師の先生に、「コミュニケーションスキルの育て方と困った行動への対応」というテーマでお話いただいた後、それぞれの保護者の方と講師の先生とで一对一の個別相談の時間を設けました。午後グループ利用の方向けのペアレントトレーニングでも講師の方（公認心理師）をお呼びし、お子さんの行動を振り返りながら、良い行動を増やすための方法を全6回にわたってお話していただきました。どちらもお子さんへの関わり

り方や日々のご家庭での悩みを相談することができ、また、保護者の方同士で思いを共有する機会にもなりました。その他にも、今年度は家族交流会や、コパン（放デイ）を利用中の保護者のみなさんを対象とした懇談会を実施しました。親の会の方や、キッズを卒業された先輩保護者のみなさんにも参加いただくことができ、お子さんの成長や学校のこと、地域のサービス等様々な情報交換の

場となったのではないかと思います。ペアレントトレーニングは保護者のみなさんからの認知度も上がってきており、実際に参加していただける方も増えてきています。そのような中で、しっかりとニーズを踏まえながら、保護者支援の在り方を検討し、さらに充実したものとなるようにしていきたいと思っています。



子育てに正解はない、といわれるからこそ、自分の子どもに合った関わりや対応に親は悩みます。人と話すことで気づくこともたくさんあると思います。正確な情報を提供しつつ、悩める保護者のその気持ちを支えていきたいと思っています。

（主任 鈴木那緒）

くるるえびす

「二年目の成長」

二〇二二年四月に開所し、二年が経とうとしています。この一年、ウイズコロナとして新しい活動も取り入れ、且つ昨年度からの活動もしっかり継続して取り組んできました。今年度の活動のうち二つ、写真を交えて振り返りたいと思います。

《くるるアートちよこっと思学会》



六月にくるるえびすとして、限定的ではありますが初めて対外行事の作品展示会を開催しました。地域の方々にくるるえびすを知ってもらおう良いきっかけになりました。来年度はさらにたくさんの方に、くるるえびすの良さを知ってもらい地域交流に繋げていきたいです。

《代官山ひまわりガーデン》

今年度もひまわりガーデンプロジェクトに参加しました。種植えにも参加し、夏場の炎天下、毎日草むしりを頑張った結果、八月には立派なひまわり畑に。そういった利用者さんの頑張りで運営委員会の方からもたくさん感謝のお言葉をいただきました。



ました。この一年、利用者さんが元気に通所して生き生きと活動している姿がたくさん見られ、くるるえびすの成長を肌で感じる事ができました。三年目の成長が楽しみです。

（副施設長 畑 賢史）

土曜相談日の効用

青梅市障害者就労支援センターでは、2011（平成23）年7月から、試行的に第二土曜日を開所し、相談日としました。2013（平成25）年度から本格実施とし、10年が経過しました。月に一度ではありますが、土曜相談日を設けることの意義は大きなものがあります。就職されている方の多くは正規雇用ではなく、契約による雇用になります。平日に休みをとって相談に来ることが困難な方も大勢おいでになります。土曜相談に来所される方の障害種別の割合は、ここ3年間の平均で知的障害の方が70%と大半を占めており、大きな特徴と言えます。

土曜相談に来所する方の目的は、困り事や悩み事の相談は勿論ですが、特に大きな問題がない中でも、会社様からの要請や支援センターとは繋がっておきたいというご家族の希望、仕事やプライベートの近況報告、仕事以外に余暇活動が上手く見つけれず気分転換も兼ねて等、人それぞれです。

職場ではない場所で第三者に思い思いの話が出来る場がある、適度にガス抜きをする場がある、ということとが、安定して仕事を継続していく上ではとても貴重なことであると実感させられています。

相談内容としては、初めて就職された方、働いて数年の方、年代別でも傾向があるように感じます。初めて就職した方では、昼休みなど周囲の輪に入らず孤独感を訴えたり、逆に一人になれる空間がないと訴えたり、休憩時間をどう過ごせば良いかの相談や、有給休暇の使い方、書類の書き方が分からないなどの相談があります。数年働いている方からは、業務上の悩みや人間関係の悩みが多いです。また年代が上がるにつれ健康面での相談も増え、健康診断の結果から予防や対策を一緒に考えることもあります。相談内容を伺い職場での調整が必要なものについては就労先の担当者へ相談させていただき

ます。面談で話すことで相談者ご自身で整理ができ、スッキリとした表情で帰られる方もいらっしゃいます。一度の相談で解決しないこともたくさんありますので、次回の土曜相談日までにご自身で取り組めることや気持ちの持ち方などを確認し、無理のない範囲で進めていただくこともあります。平日お休みが取れない利用者も、土曜日に相談ができると思えることで少し安心感があるようです。

様々な相談がございますが、面談後には「来てよかった」「明日からまた頑張ろう」と感じてもらい、引き続き土曜相談日を有効に活用していただけるようにと考えております。（生活支援コーディネーター 岩崎博子）

三本柱の完成

三ツという数字は、三本の矢や三本柱のように安定や強固なつながりなどに使われます。青梅福祉作業所では作業の三本柱ができております。

この三社様の作業は全国規模です。作業単価も十分にご配慮していただいていますので、三社様合計の年間収入は、一千万円となっております。これまで一千万円の大台に乗せるためには十数種類の作業をしなくてはなりませんでしたが、基幹作業三本柱の完成は悲願でもありました。

スタジオオアリス

是全国展開している写真館です。七五三や成人式、入学式などの記念写真を取り扱っています。その製品の中で記念プレートに写真を焼き付けるといふものがあり、その大切な写真プレートを収める箱を当作業所が制作しています。

（株）リハーツは、給湯器などのメーカーである（株）ノーリツの系列会社です。どこのご家庭でもガス給湯器はほぼありますが、それはほぼ壊れます。その時交換した給湯器を分解し、貴重な金属を取り出しています。



（株）新日本包装では、さまざまな箱を製作しています。機械製作できない箱は数えきれないほどの種類があります。現在、当作業所はチョコレートメーカーのモロゾフの箱を製作して、年間三十六万箱製造することを目標としています。全国各地にあるものを手作業で支えているという誇りは大きいです。残念なことは、当作業所を利用いただいている皆さんにお支払いする工賃が、いまだに全国平均額を超えていない事です。

令和五年度は、それでも工賃額を上げられるメドがつかしました。令和四年度の作業総収入は、前年を大きく上回りましたが、利用者の皆さんの出勤率が高かったこと、そして何よりも経費が大きく跳ね上がったこと、思ったよりも工賃額を上げられそうにないのです。しかし、それでも令和四年度末に三本柱が完成したことが希望となります。新型コロナ禍明けの明るい明日に利用者の皆さんと共に一歩ずつ踏み出したいと考えています。

（所長 福田和弘）

法人報告 令和4年度法人実践報告会

本年度の法人実践報告会が2月21日に実施されました。報告会も昨年度からハイブリッド形式で行われ、成人部多目的室の会場と各事業所にて、リモートで聴講しました。

今回は3事業所から実践報告があり、児童部放課後等デイサービスからは「支援を通じて、子どもと関わる自分の想い」をタイトルに発表者自身の経験を含めて療育活動の実践を発表。



渋谷区くるるえびすから「開所二年目を超えて」というタイトルで「くるる」の語源である「彩色・いろどり」のように2年間で積み上げた多彩な活動を発表。



成人部グループホームより「自分の人生を取り戻す」利用者の生い立ちや人生観にまで掘り下げた支援の実践の報告がありました。

法人報告

トルコ・シリア地震義援金

東京都発達障害支援協会及び東京都社会福祉協議会から会員施設への呼びかけがあり、この程あったトルコ・シリア地震への義援金を各事業所で集めたものを当法人からも支援させて頂きました。

感染症予防対策として、中々集う形での研修ができない状況が続いています。ただ一方でリモートを使うことで、会場に集まる事のできない人数や職階の人も各事業所から聴講できるメリットも多いにあります。



令和四年度
寄付者御芳名

五十嵐肇様・五十嵐やすし様・石田健太郎様・一般社団法人昭和会館様・榎戸俊行様・青梅手をつなぐ親の会様・金子信也様・株式会社デンソー様・株式会社福祉会計サービスセンター様・株式会社リハーツ様・河津英彦様・桐生麻里子様・窪寺真章様・倉川かずえ様・坂元昌子様・島崎ツル子様・宿谷敏久様・鈴木一匡様・須田恵美様・大和証券株式会社国立支店様・柘植吉治様・羽村市手をつなぐ親の会様・三ツ橋茂男様・山川勇様・山下尚様・有限会社野口商店様・吉岡正夫様・青梅福祉作業所保護者会梅の実様・成人部保護者会様・匿名希望様

皆様からお寄せいただきましたご支援、ご協力に厚く御礼申し上げます。他にも多くの方々から、子供たちへのお菓子やおもちゃ等のたくさんのお心遣いをいただいております。心より感謝申し上げます。



法人報告 理事会・評議員会の開催

3月18日(土)多目的ホールにおいて理事会が、3月25日(土)には評議員会が開催されました。

令和4年度最終補正予算及び令和5年度の事業計画及び予算、管理職の人事に関する件等、多岐にわたる審議がなされ、質疑応答があった後、決議されました。

編集後記

将棋の世界では試合中にマスクを外し反則として出場停止になったというニュースを目にしました。国は、この3月13日以降のマスク着用新たな考え方を示しました。新型コロナウイルスが始まり、マスクを着用する生活に慣れ、外すことに不安を覚える人もいるでしょう。3年もこの様な生活を送っていると、この間に出会った人、関係をもった人の顔を認識できていない人もいるかも知れませんね。反則にならないまでも、人と関わるエッセンシャルワーカーという自覚は必要なのだと思います。